

REED ORGAN

日本リードオルガン協会発行 ニューズレター NO.3
事務局；156 東京都世田谷区宮坂 1-44-13 森 啓一 方
編集人；336 埼玉県浦和市領家 2-7-15 赤井 励
1997年10月1日発行：協会の許可なく転載・複写を禁ず

坂田亮一氏（取材時91歳）の調律回顧談

取材；和久井輝夫，赤井 励

取材日；1996年5月24日

Q. 調律師になったのは？

A. 大正7年（1918）8月5日に西川に入社した。弱視（色弱）なので音のほうなら良いと思ってこの職業についた。西川では聾者も7,8人採用していた。ピアノのコマピン打ちは非常に大きな音の衝撃があるが聾者は平気なわけだ。聞こえなくてもハンマーの当たり具合で深さがわかる。障害者の採用という点で西川は先進的だったと言える。当時、調律師はオルガンもピアノも両方でこななければいけなかったので、オルガンも勿論やった。調律課というセクションで養成していた。オルガンを3年、ピアノを2年で5年の徒弟修行をした。5年目が終わったとたん、関東大震災だった。地震の時、西川工場の二階にいたが、二階が落ちて一階に乗ってしまっただけで助かった。火は出なかった。

Q. 徒弟時代の思い出をお教え下さい。

A. 最初の一年の月給は50銭だから饅頭を何個か食べたらなくなってしまった。だから親から仕送りしてもらったりした。2年で1円、5年でやっと3円になった。徒弟修行が済むとその時50円くれた。西川ではお札奉公はやらなくてもよかった。それで背広と寝具を買っちゃった。月給はいきなり40円になった。大学卒のサラリーマン並の給料になった。だが寄宿者は差引かれて30円だった。調律の採用は手を見る。こう言っただけでは何だが、私のような長野県人は寒いところから来ていて、しばしば手が荒れているのでなかなか採用されない。私は手がきれいだった。油手の人も採用試験ではねられました。手先が敏感かどうか、新聞紙を重ねた紙片でテストした。新聞紙一枚が1ミリの千分の17なのだが、これを重ねて厚さを変えたものをいくつか用意して薄い順に並べさせる。並べ間違えたらだめなんです。今のように学校の成績を見るのではなく、手を見たのです。調律師として成熟したかどうかは、調律している時に親方がそっとドアを開ける。その時、振り返ればもう一人前だ。ドアを開けた時に気圧が変わって少し音程がゆれる。それに気づけばいいんです。もうピアノ技術者協会の創立メンバーで生き残っている者は私以外ほとんどいないはずですよ。

Q. 西川オルガンが教会に多く残っているようですが。

A. 西川オルガンはとくに教会用として区別はしていません。だが柔らかい音を好む人が購入した。西川の調律師はしばしば鉛筆でローマ字のサインを入れた。R. SAKATA, KOKISO, WATANABE など。製造番号が二種類あるということは知らない。私のいた時代の西川の番号は連続していると思う。（浜松の中沢工場では西川モデルを作った。三田の軍楽隊でも西川のピアノとオルガンがあって調律しに行った。そのすぐ近くにこの人（奥様）がいたんだから世間は狭い（笑）。

Q. 西川のリードのことをお教え下さい。

A. はじめはアメリカ製、のちにドイツ製にかわった。